

実践主題

協働し、自ら学ぶ児童の育成  
～学び合いを中心とした授業改善を通して～

1 実践主題設定の理由

令和2年度は、新学習指導要領の本格実施の年となった。主体的・対話的で深い学びを実現するために、学習する子供の視点に立った指導がさらに求められてくる。そのためには、教師が教え子供たちに身に付けさせるという従来の指導の概念（図1）を大きく転換させていく必要がある。子供を有能な学び手にとらえ、子供同士の協働的な活動を通して課題の解決やねらいの達成を図れるようにする（図2）ためには、どのような手立てが必要かを考え「協働し、自ら学ぶ児童の育成～学び合いを中心とした授業改善を通して～」を実践主題として授業改善を行った。

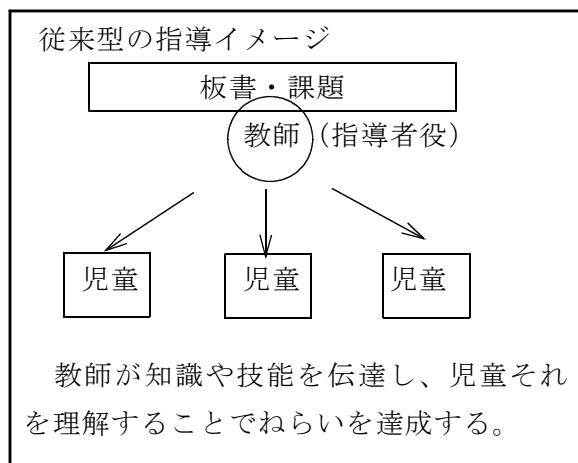


図1 従来型の指導イメージ

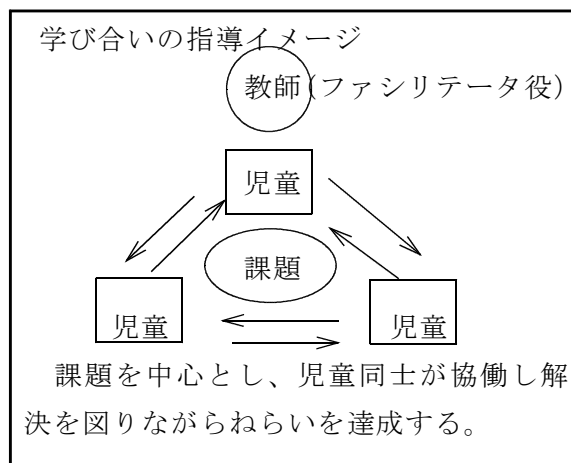


図2 学び合いの指導イメージ

2 実践のねらい

教師主導の授業から児童同士が関わり合いながら学ぶ授業への移行を目指し、協働し、自ら学ぶことのできる児童の育成を図る。

3 実践の内容及び方法

今まで行っていた「話し合い活動」では、グループで話し合っても、一部の児童しか話さなかったり、それぞれが意見を発表し、拍手をして終わりにしたりということが多かった。児童が他者と関わり合いながら自分の考えを広げたり深めたりするためには、学級全体での「学び合い」に対する意識の共有が必要だと感じ、本実践ではまず初めに、ロールプレイを通して「学び合いで大切なこと」について考える機会を設けた。

ロールプレイをして、そこで気付いたことをお互いに出し合わせることで、学び合いの活動の際に大切なことについて児童自身が気づき、共通の目標とすることができた。この活動を最初に行うことで「相手の意見をしっかり聞く」「テキストや資料など、根拠を明確にして自分の考えを伝える」「質問をすることでお互いの考えを深める」といったことを児童一人一人が意識しながら、その後の活動を行うことができた。また、分からない時

には友達同士で相談し合ってよいことや相手に分かるように教えることで教える方の学びも深まることなどを全体で確認することで、「教わること＝できない・恥ずかしいこと」という意識が少なくなった。これにより、お互いに質問し合える雰囲気学級に生まれた。

2つ目にはジグソー学習を取り入れた実践を行った。教科書の「やまなし」以外の3つの宮沢賢治作品を各グループで読み深め、そこで気付いたことを持ち寄って学び合うことで、多面的な視点で考えたり、複数の作品に共通する作者とのかかわりに気付いたりできることを目指した。ジグソー学習を取り入れたことによって、「自分の担当作品について相手に伝えるためには、しっかり読んで考えなくてはならない」という必要感や「一度にいくつもの作品にふれることができ、他の作品の人の意見も参考になる」という課題に対する意欲の向上が見られた。

3つ目は「高いレベルの課題への挑戦」による実践を行った。教科書で学習するよりも難しい複雑な図形の面積を求める課題へ挑戦させた。上位群の児童でも普段では手が付けられないような問題であったが、学び合いを取り入れることで全員が粘り強く課題に取り組む姿が見られた。また、グループ内で行き詰まった時には、他のグループの所へ行き相談する姿も見られるようになった。解いた後には、自分たちが見つけた解法を他のグループに分かりやすく伝えるためにはどうしたらよいかについて熱心に議論し、図や色分けなどしながら工夫してまとめる様子が見られた。

3つの実践を通して、学力差に関係なく課題解決に向けて主体的に取り組む姿が多く見られた。教師に頼らず児童同士が熱中して学ぶ姿に、学び合いへの手応えを感じた。

#### 4 実践の経過と結果

##### (1) 実践1 ロールプレイを通して「学び合いで大切なこと」について考える

まず第1の実践として学び合いについて学級全体での共通理解を図った。国語科の「やまなし」の単元で、児童同士の意見交流を中心活動に据えるにあたり、学び合うことで得られる効果や学び合いをする際に大切なことは何かについて、ロールプレイを通して考えさせた。

グループでのロールプレイをする前に、「学び合い（今回は他者との対話を中心）で大切なことは何か」について、ワークシートに記述させた。その後、ロールプレイを通じて気付いたことについて意見交流し、再び考えさせワークシートに記述させた（図3）。

図3 学び合い後の児童の考えの変容

学び合いで大切なことを考えよう。名前  
 めあて「2つの話し合い活動を催して、学び合いをするときに大切なことは何か考えよう。」  
 ・AとBの2つの話し合いをロールプレイしてみよう。  
 ・AとBの役割を決めて、そのせりふに合った様子から話し合おう。  
 ・3人の目は「一人二役」する。  
 ・2グループで話し合って、意見をまとめる。  
 【話し合う目的】「ロールプレイAとBのちがいは何か。どうして、そのちがいが生まれたのか」を考えながら、学び合いをする時に大切なことは何かをまとめる。  
 学び合いをするときに大切にすること

後 ← 前 男  
 相手の目を見る。  
 相づちをうつ。  
 話の途中で別の話をしない。  
 言葉に合った声とトーンで話さない。  
 相手の意見もまよ。  
 理由を全否定しない。  
 理由を全否定しない。  
 質問をする。  
 納得する理由を言う。  
 他の人の意見を否定しない。

後 ← 前 A子  
 人の意見に疑問があったら質問をする。  
 自分の意見をみんなに分かやすく言う。  
 納得するような話し合いをする。  
 友達か意見を言っていたら最後までレカソ聞いてあげる。

グループでの学び合い前には、A子は「相手の話をしっかり聞く」ということしか書くことができなかったが、活動後には多くのことを書くことができていた。また、B男は行動面での記述が多かったが、「理由を具体的に言う」「質問をする」などグループ内で出し合った意見を基に大切な考え方について記述できていた。学び合いを通じて量的にも質的にも児童の考えが向上していることが分かった。その後、それぞれの意見の共通する部分や大切だと思う部分をまとめ、「みんなで考えた学び合いで大切なこと」(図4)にまとめた。さらに、『『教師が学び合いで大切なことはこの3つです。』と教えることは簡単です。でも、私が教えなくても、みなさん自身が考えを出し合うことで大切なことを導き出すことができるのです』と伝えた。児童の活動をフィードバックすることで、児童の協働して学び合うことの意欲の向上を図った。

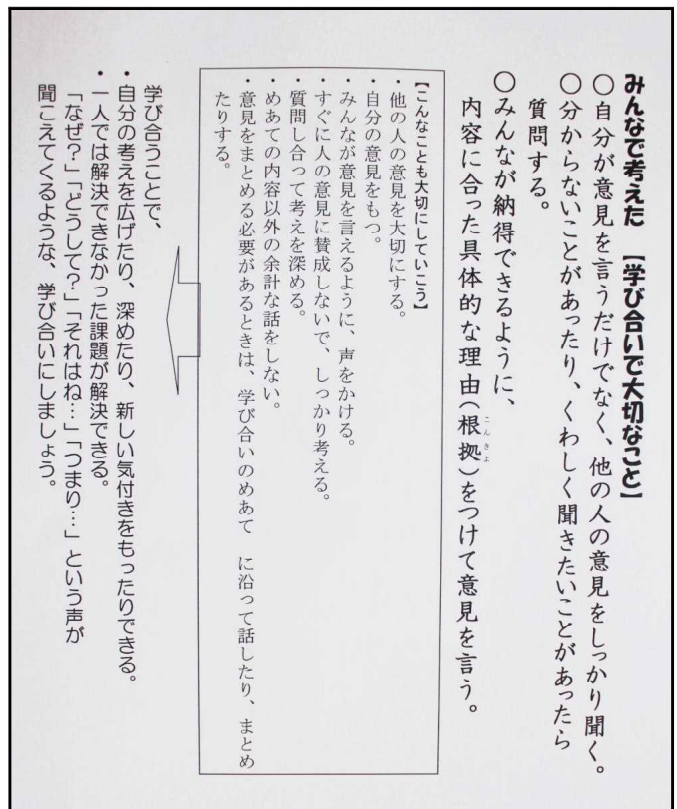


図4 児童が考えた「学び合いで大切なこと」

と伝えた。児童の活動をフィードバックすることで、児童の協働して学び合うことの意欲の向上を図った。

## (2) 実践2 国語科「やまなし」資料「イーハトーヴの夢」におけるジグソー学習

実践1を通して、児童は他者との「学び合いで大切なこと」を理解し、協働しながらねらいを達成する活動方法を学んだ。そこで、「やまなし」の単元においては、ジグソー学習を取り入れ、各自が専門的に学んだ各物語の内容を、「学び合いで大切なこと」を意識しながら交流し合い、共通点や相違点を見つける活動を取り入れ、多面的にねらいに迫るように単元計画をした。

本単元の目標「作品の世界と作者とのつながりをとらえ、自分の考えをまとめることができる。」へ向けて次のような流れで学習を進めた。

- ①一斉指導による「やまなし」と「イーハトーヴの夢」の読み取りと、グループで担当した「オツベルと象」「雪渡り」「双子の星」の3つ物語を読む。
- ②担当した3つの物語の作品と作者の人生とのつながりについて同じ物語同士のグループで話し合う。
- ③違う物語同士でグループを作り、各グループで話し合った内容を伝え合う。
- ④今までの学習を基に、作者が「やまなし」にこめた思いについて考え、「イーハトーヴの夢」や他の作品などを根拠として自分の考えを文章にまとめる。

当初は同じ物語を読んだ児童同士であらすじをまとめ、他のグループに伝えることを考えていたが、予想以上に難航していたため、教師が物語あらすじをまとめたものを活用させた。これにより、「作品と作者とのつながり」が論点となり、他のグループも自分以外の物語の大まかな内容を共有しながら学び合いができるようになった。

宮沢賢治が「やまなし」に込めた思いについて考えさせる場面では「教師はファシリテータ役に徹する」ということを意識して授業を行った。自分自身、今までの学び合いの際には、机間指導をしてアドバイスをしたり自分がイメージするねらいへと軌道修正を行ったりしていた。しかし、そうした教師の言動によって、児童は教師の言動を正解と捉え、教師の発言やアドバイスを待ってしまう様子が見られ、児童の同士の学び合いを阻



図5 児童の活動を見守る様子

害してしまうことにつながっていた。そこで今回は「活動が停滞してる以外は児童に任せる」ということを意識して、教卓から動かずに授業に臨んだ(図5)。

教卓から各グループの話し合いに耳を傾けながら25分間教卓から動かず、必要最低限の指示にとどめ、児童に任せることは根気があることであった。しかし、教師からの助言や軌道修正がないことで、児童は友達の発言や宮沢賢治の作品から考えを導き出そうとしていた。「どうしてそう思ったの」「でもさあ、それは～じゃない」というように、出された意見に対して反応する様子が見られたことは実践1の成果と考えられる。しかし、一方では促されてもなかなか発言できない児童も見られた。

停滞なのか熟考なのかは判断が難しく、同じグループの様子を見ていた参観者からも「声をかけた方がよかったのでは?」「宮沢賢治の作品としっかり向き合っていて考えていたので見守っていてよかった」といった異なる意見が出ていた。熟考か停滞かを見極め、ねらいに迫るような問いかけや他のグループとのつなぎを提案することが必要であると感じた。

以下に授業後に書いた児童の意見(200字程度)を紹介する。

E男 作者は読者に「人の役に立ってほしい」ということを伝えたかったのではないかと思う。それは、やまなしが落ちてきて、かにたちが「おいしそうだね。」と言っていたのでかにに食べてもらいたいのじゃないかと思った。他の物語との共通点は「役に立っている」ということです。「雪渡り」でも紺三郎の役に立っているし、「双子の星」でもチュンセ童子とポウセ童子が役に立っているし、「オツベルと象」でも象が人の役に立っている。だからぼくは作者が読者に「人の役に立ってほしい」と願って「やまなし」にしたんじゃないかと思った。

F女 作者は、読者にかわせみのような悪い行動を伝えたくなかったのだと思う。理由は、やまなしはかにの兄弟に食べさせるために木から落ちた部分と賢治が言った「農業のために一生をささげる」という言葉から賢治とやまなしが同じなのだと思った。賢治が書いた「双子の星」もチュンセ童子とポウセ童子は自分の身をけずってまで他の人を助けていました。けれど、かわせみは魚の命をうばっていった。賢治は命をうばうような人になってほしくなかったから題名は「やまなし」にしたと思った。



授業のまとめに書かせた意見文を読むと、全児童が複数の宮沢賢治の作品の内容を根拠にして自分の考えをまとめることができていた。そして「十二月の平和な世界を目指していたから」「やまなしをかにたちが食べて次の命につないでいったから」「つらいことやこわいことがあっても平和なことや楽しいことが待っているから」など、多様な考えが見られた。もし「やまなし」と「イーハトーヴの夢」だけをテキストとして、教師主導の授業で進めた場合は、私が考える「作者と作品のつながり」を全員に押しつける形になり、このような考えの広がりはなかったであろう。また、ジグソー学習を取り入れたことで、いくつもの作品を一度に読むことが困難な児童でも複数の作品にふれることができたり、自分の担当した作品を他の児童に伝えるという必要感があるため、学び合いまでに熱心に読み込んだりすることにつながった。

さらに、本実践ではこんな様子も見られた。G女は授業のまとめで「お魚が行ったり来たりするのをかにが優しく見ていることと、賢治が最後の力をふりしぼって人に優しく教えているところが似ている」と書いて提出した。作品と作者のつながりが弱い内容に、「授業中の発言が少なく苦戦したし、もう少し支援が必要だったかな」と感じた。しかし、次の日「先生、まとめの紙をください」と申し出てきた。理由を聞くと「授業中はうまく考えがまとまらなくて、でも、書かなきゃだから書いたけど、納得できないので家でもう一度考えてきたんです」とのことだった。再提出されたまとめには「私はかわせみが魚をとっていく部分に作者の思いが最も表れていると思う。賢治は羅須地人協会を作り人を集めて自分も一緒に勉強した。生きるためには、協力しなければいけない。でも、生きるためには、かわせみのように同じ命があってもその命を食べていかなければいけないということだ。」と書かれていた。読解に苦手意識があり、意見を言うことにも消極的なG女だったが、学び合うことで粘り強く課題に向き合うことができていたことが伝わってきた。

ジグソー学習を取り入れた学び合いを本格的に行ったのは本実践が初めてだったので、児童がどのような意識で取り組んでいたのかについてアンケート形式による振り返りを行った。

#### 6年国語 作品と作者のつながりをとらえ自分の考えをまとめよう

今回、「学び合い」を通して目標へとせまる学習をしました。学習を通して、感じたことや考えたことを振り返り、自分の考えに近いものに○をつけましょう。

1 学び合ったことで自分の考えが広がったり、深まったり、新しい考えに気付いたりすることができた。

①とてもそう思う7人 ②そう思う4人 ③あまりそうは思わない0人 ④そう思わない0人

2 学び合い活動は、先生が前で説明して黒板を書き写す活動より、自分で考えたり調べたりしなら取り組むことができた。

①とてもそう思う10人 ②そう思う1人 ③あまりそうは思わない0人 ④そう思わない0人

3 よりよい学び合いにするために、事前に教科書や資料や物語をよく読んできた。

①とてもそう思う6人 ②そう思う5人 ③あまりそうは思わない0人 ④そう思わない0人

4 よりよい学び合いにするために、意見を言ったり聞いたりすることが大切であると思った。

①とてもそう思う11人 ②そう思う0人 ③あまりそうは思わない0人 ④そう思わない0人

5 学び合うことで、作者と物語にはつながりがあることや、ちがう物語の中にも共通の思いがこめられていることがあることに気付けた。

①とてもそう思う9人 ②そう思う2人 ③あまりそうは思わない0人 ④そう思わない0人

6 学び合うことで、クラスみんなが分かったり、できたり、考えをもてたりした。

①とてもそう思う8人 ②そう思う3人 ③あまりそうは思わない0人 ④そう思わない0人

7 学び合いで使った資料・物語・ワークシートは作者と作品のつながりをとらえるのに役に立った。

①とてもそう思う10人 ②そう思う1人 ③あまりそうは思わない0人 ④そう思わない0人

8 先生に答えを教わるのではなく、自分たちでめあてを達成させる学び合いの方がよい。

①とてもそう思う6人 ②そう思う5人 ③あまりそうは思わない0人 ④そう思わない0人

9 他の教科でも、学び合いをしたい。

①とてもそう思う7人 ②そう思う4人 ③あまりそうは思わない0人 ④そう思わない0人

10 「学び合い」してみたの感想や考えたことを書きましょう。(抜粋)

H女 みんなが納得するように考えたり発言したりしたけれど、難しかったです。意見がまとまった時はとても達成感があり、話合いが深まるだけでなくクラスの仲も深まった気がします。

I男 学び合いをしてみて他の授業と比べてものすごく真剣に考えて思考力を使ったと思います。算数では公式を覚えたり答え合わせをしたりを一緒にすることは多いけれど学び合いはあまりしていません。今回は自分達だけで考えを導き出したのでとてもためになったし、楽しかったです。

G女 最初は全然考えられなかったけれど、最後はしっかり考えたらまとめることができた。学び合いのよさは、自分の意見をもっていても全員の前では口にすることはできないけど3～4人でやることで自分の意見を発言することができることだ。また、人とやることで、自分にはなかった意見を知れて、それを参考に自分もまた新しい意見をもてる。

アンケートの回答からも学び合いを取り入れた授業が、児童の意欲の向上や主体的な学習態度につながっていったことが分かる。また、G女(6ページのG女と同一)の感想からは、グループ内で活発に発言していなくても児童自身は聞いたりテキストと向き合ったりしながら深く学んでいるということが分かった。

本実践の課題は、予定した時間を大幅に越えてしまったことだ。一斉指導による「やまなし」と「イーハートヴの夢」の読み取りに時間をかけてしまった。また、学び合いも意見がまとまらないと「もう1時間やるか」と延ばしてしまった。学び合いを学習の中心に据え、そこに時間がかけられるように、共通理解としての読み取り部分を精選していく必要がある。

### (3) 実践3 算数科 高いレベルの課題(複雑な図形の面積)への挑戦

実践3では、複雑な図形の面積を学び合いによって求める活動を行った。本学級の児童は算数の学習において学力差が特に大きく、一斉指導の際には学習支援員や担任が個別に指導することが多かった。また、応用的な問題や発展的な問題になると多くの児童が手かずになってしまう状況であった。

そこで、まずは「分からないな」「教えて」「大丈夫?分かる?」と気軽に言え合えることが大切だと伝えた。これにより、授業で演習問題に取り組んでいるとき、友達に教わりに行ったり、自分の課題が終わった後、困っている友達がいらないかを見て回ったりする

児童が多くなった。しかし、答えだけ聞いて済ませていたり、一方的に説明をして終わりにしている様子が見られたため以下の「教わる方も教える方も学ぶためにはどうすればよいだろうか」を提示し、2つの方法を比較して考えさせた。

### 教わる方も教える方も学ぶためにはどうすればよいだろうか

算数の時間「 $3 + 7 \times 6$ を求めましょう。」という問題をしました。

A男さんは、答えを間違えてしまいました。自分では解決できません。そこで、B子さんに質問に行きました。2つの方法を見て、どんな違いがあるか、どちらの方法がおたがいが学ぶためのよいかのかを考えましょう。

#### ①の方法

A男  $3 + 7 \times 6 = 60$ ってしたら間違いだった。B子さん答え教えて。

B子  $3 + 7 \times 6 = 45$ だよ。

A男 そっか45か。ありがとう。(45と書き直して先生の所へ)

#### ②の方法

A男  $3 + 7 \times 6 = 60$ ってしたら間違いだった。計算は合っているはずなんだけれど何で違うのかな。B子さんやり方教えて。

B子 いいよ。A男君はどうに解いたの？やってみて。

A男 まず、 $3 + 7$ をして10でしょ、それに6をかけたから60ってやったよ。

B子 そっか、左から順番にやったんだね。でも、計算にはきまりがあったの覚える？

A男 計算のきまり…、ああ、(かっこ)は先にやるとかのやつ？

B子 そうそう、それ。じゃあ足し算・引き算とかかけ算・わり算の関係は？

A男 確か、足し算・引き算とかかけ算・わり算が混ざっていたら、かけ算・わり算を先にやるんだっような…、あつ、そうか！ $7 \times 6$ を先にやんなきゃだったのか。

B子 計算のきまりは大事だよ。先に計算する $7 \times 6$ に線を引くとミスが減ると思うよ。

A男 すると答えは45だね。ありがとう。でも、なんでかけ算・わり算を先にやるのかな？

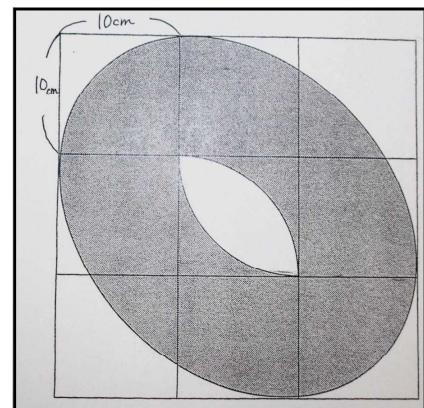
B子 そういうきまりだから覚えていたけど…。確かに不思議だね、今度調べてみよう。

提示された2つの方法から気付いたことを出させると「①はどちらも学んでいない」「②は、すぐ答えを言わないで一緒に考えている」「②なら、A男は次は自分で解ける。①はまた間違える」「最後A男に質問されてB子も学ぶことが出てきた」などの意見が出された。そして②の方法のようにしていきたいという感想を全員がもった。

算数の学習では習熟度がはっきりしていて「できる児童＝教える側」「できない児童＝教わる側」という構図になりやすく、教わる側は劣等感を抱いてしまうことが考えられる。しかし「みんなのできるようになろう」「教える方も大きな学びを得ている」ということを学級全体で確認することで、お互いが安心して学び合える状況となった。

こうして、学び合いに対する意識の高まりを受けて、右のような図形の面積を学び合いによって求めた。教科書や問題集の発展問題よりも難しく、授業後のふり返りを読むと、問題を見た時、ほとんどの児童が「1人では解けなそうだ」と言う感想をもち、半分近い児童が「難しそうなのでいやだ」という感想をもっていたことが分かった。

しかし、学び合いで面積を求める時間になると、児童は積極的に意見を出し合いながら面積を求めようとして



いた。

本実践は12月の2学期のまとめの学習の一環として行った。6月の円の面積の学習の際にも教科書に載っている複雑な図形の面積を求める際にもグループでの学び合い(図6)をした。切り貼りする図形を用意したり、机間指導をしてアドバイスをしたりしたが、なかなか正解へはたどり着かず、多くの時間を費やした。



図6 6月の授業の様子

今回の図形では「答えが分からなくてもよいので2時間でできるところまでやろう」と伝え学習を始めた。グループの様子を見てみると、実践1で共通理解した「学び合いで大切なこと」を意識し、気付いたことを積極的に伝えたり、身を乗り出して熱心に聞いたりする姿が見られた。そして、今まで学習したことを生かしながら、整理して解いたり、分かったことをまとめたりすることができた(図7)。



図7 熱心に課題に取り組む様子

一斉授業では集中を切らしてしまう児童もグループの一員として分かるまで質問し、また、グループのメンバーはその児童が分かるように丁寧に説明をすることができていた。しかし、グループによっては算数が得意な児童が自分一人で考えている様子が見られた。すると他のメンバーから「一人でやらないで一緒に考えよう」と促す声かけがされた。その後は、自分の考えを説明しながら協力して解き始めることができた。この算数の得意な児童のグループは出した答えが正解ではなかったため、他のグループに相談しに行き解決を図っていた。

正解を導き出せたグループは、他のグループのメンバーに分かりやすくまとめる活動に入った。まとめを書いている児童は、メンバーに確認しながら図や言葉を使ってまとめていた。まとめたワークシートを見ると、色分けや修正テープでの白抜きなど、工夫してまとめていた(図8)。2時間の学習の中で全グループが答えを導き出し、グループとしてのまとめを仕上げることができた。学習のふり返りで「複雑な図形の面積を求めるときはどうすればよいですか」という問いには「今までに習った図形を見つけて求める」と多くの児童が答えていた。その後、教科書レベルの発展的内容の問題に取り組みさせたところ、算数に苦手意識のあった児童も「これ簡単」とつぶやきながら解いていた。

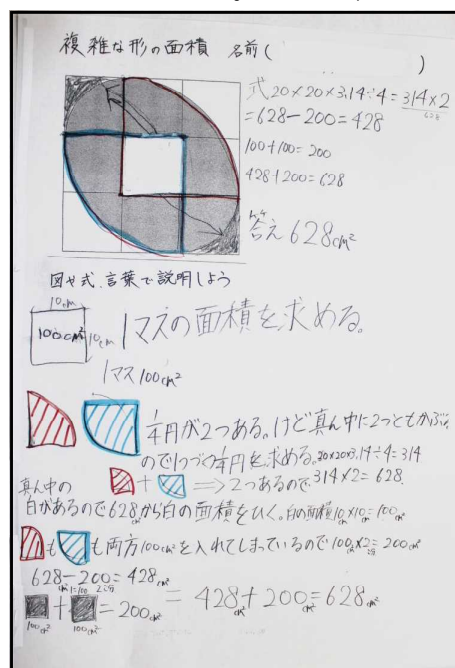


図8 工夫した解法のまとめ

以下は本実践の児童の感想である。J男もK男も一斉授業では発展的な問題には手が付かないことが多かったが学び合いの際に最後まで集中して課題に取り組むことができた。



J男 問題を見た時は難しいと思って解けないと思っていました。でも、やってみたらグループの人と意見を出し合って最後まで解けました。なので、分からないところがあったら、質問して協力して解いていきたいです。

K男 一人では絶対解けませんでした。今までは難しい問題はすぐあきらめていました。でも分からないところを聞いたら、教えてくれて分かりました。他のグループは、自分達とちがう解き方でおもしろかったです。

本実践の課題としては「児童が夢中になるよう高いレベルの課題を設定することの難しさ」がある。「学び合っている課程が大事だから、答えが出なくてもよい」とは言っているが解けなければ児童の意欲は低下してしまうのではないかという不安がある。学び合いにおいて課題の設定は大きな役割を担っている。単元のねらいから外れぬよう気を付けながら、児童が夢中になれる課題の設定していきたい。

## 5 まとめ

本実践では、学び合いを中心とした授業改善を通して自ら学ぶ児童の育成を目指した。

今までの指導と変わらないことは「単元のねらいの達成」から外れないことである。学び合いはねらいに迫るための手段であることを忘れずに計画を立てなければならない。ここを外してしまうと手段であるはずの学び合いが目的のようになってしまうからだ。

今までの指導と大きく変わったことは「学びの中心は児童である」という意識が高まったことである。今まではヒントカードや具体物、ワークシートなどを工夫し「ねらいとする知識や技能について、いかに分かりやすく教えるか」ということに力を注いできた。しかし、本実践を通して「児童同士をどのようにつなげてねらいに迫ることができるか」について考えることが多くなった。これは、教師主導での一斉指導の時よりも学び合いの時の方が学級の全児童が課題に集中している姿が見られたからである。

本実践での成果は、学力差があっても児童同士が補い合ったり、学力差に関係なく気付きが生まれ、意見を広げたり深めたりする様子が授業で多く見られたことだ。これは学び合いの前にロールプレイなどで共通理解を図ったことが、効果的であったと考えられる。児童が考えた学び合いの際の約束や心構えを事前に共有したことで、教師が活動の途中で軌道修正することなく学び合いを通してねらいへと迫っていくことができた。

課題としては、やや単発的な実践になってしまったことである。各教科の単元において学び合いを毎時間行うことは難しいし、教師主導での一斉指導の方が効率よく単元のねらいに迫れることもある。今回は、単元に入る直前に「この部分では学び合いが効果的ではないか」と考え授業改善を行うことが多かった。そして、やりながら気付いたことを次の授業実践につなげていった。単元によっては、一斉指導のみで進めることもあった。学び合いを特別な活動とするのではなく、「どこでどのような学び合いをしてねらいに迫ると効果的か」を考えて、各教科の単元計画に位置づけていくことが必要である。

今、教室では登校するやいなや「宿題で分からない問題があったから教えて」と声をかけ、問題を熱心に解こうとする様子、そして、寄り添い丁寧に声かけをする児童の様子が見られる。本実践の「協働し、自ら学ぶ児童の育成」への道のりは長く、今回だけで達成したとは言えないが、学び合いを中心とした授業改善によりその一歩は踏み出せたのではないかと児童の姿から感じられた。今後も授業改善に取り組み、実践を重ねていきたい。